

A Brave Man Saves a Holy Lady.

不屈の勇士は 聖女を守りて

Vol. 2

Akita Totaru
戸津秋太 著



目次

序章	決断	7
第一章	討伐依頼	14
第二章	剣聖	33
第三章	弟子入り	62
第四章	王都	91
第五章	加護と滅亡の神託	135
第六章	残り七日	162
第七章	神界の黒竜	185
第八章	神力の解放	202
第九章	不屈の勇士	226
第十章	別れ	254
終章	帰還	283

ラーシャ・ナクレティア

リーティス王国唯一の
唯一の第一位冒険者。
腰までの銀髪に紫紺の目。
自分のことを「僕」と呼ぶ。
「剣聖」の二つ名を持つ。

しのはら ゆうま
篠原悠真

本作の主人公。
命の安全を第一に考えて
冒険者生活を送っていたが、
ゴブリン大群戦で自ら死地に
飛び込み死にかける。

シャルナ

シスター
白髪碧眼の聖職者。
人々の怪我を治す《奇跡》と
呼ばれる加護を持ち、
「聖女」と謳われる。

ネロ・フォレス

青髪小柄なギルド看板受付嬢。
普段は抑揚に欠けるぶっきらぼうな
口調で対応するわりに、
その実面倒見のいい姉御肌。

巫女

王都の神殿にいる巫女。
他人の加護が見られるという
加護を持つ。

教祖

王都の神殿の教祖。
神から神託を授かるという
特殊な加護を持つ。



序章 決断

ファウヌス近郊に位置する小さな村——ネレース村やアウラ村にゴブリンの大群が襲来するとうる危機が、劍聖ラーシャ・ナクレティアの手によって無事鎮圧ちんあされてから一週間が経った。

劍聖以外の冒険者の多くがゴブリンの大群に怯ひるむ中、ただ一人、文字通り命を賭として立ち向かった篠原悠真しのはらゆうま。最終的にゴブリンを殲滅せんめつしたのは確かにラーシャだったが、悠真が捨て身で侵攻を食い止めていなかったら、ネレース村はとくに全滅していただろう。

その討伐の功績として、劍聖の温情もあり、悠真は百二十万マネもの大金を得た。

これだけあれば、半年間の宿代と食事代を賄まかなうことが出来る。

故に悠真は、討伐で負った怪我もようやく癒えてきた頃、二つの大きな決断を下した。

一つめの決断。それはこの世界に来てからずっと抛りどころとしてきた教会を出ること。もともと生活が安定するまでという条件で教会に置いてもらっていたのだ。

これだけの大金を手にした以上、ここに置いてもらい続ける道理もなくなった。

そしてもう一つ。

教会を出ることを決める以上に悩み、悩んで、悩み抜いたことだ。

この決断を是とするか否とするかを考えた時に、悠真は自分のことを恐ろしく感じた。

世界の在り方に順応しはじめている自分のことを。

とにかくにも、悠真は前日の夜まで悩み続けていたそれら問題に対し、起きて早々思い切った結論を出すと、長らく世話になった教会の一室を後にした。

＋　＋　＋

「おはよう、シャルナ」

部屋を出てすぐ、まだ薄暗い廊下に揺らめく穢^{けが}れなき純白を視界に捉えた悠真は声を掛けた。

相手は言うまでもなく、皆に聖女と崇められている少女、シャルナだ。

「あ、ユーマさん、おはようございます！」

悠真の声に振り返りながら彼女は弾むような笑顔を見せる。

思わず、見惚^{みと}れた。

あの日、ゴブリンの大群から彼女を助けて以来、それ以前までは決して見られなかった表情が頻^{ひん}

繁^{ばん}に彼女の顔に浮かぶようになって、悠真は密かにどぎまぎしている。

その表情とはつまり、男を勘違いさせてしまうような類いのものだ。

紅潮しているに違いない自らの頬を手で覆い隠しながら、悠真はシャルナに話そうと思っていたことを口にする。

「シャルナ、今少しいいかな？　大事な話が……ああいや、あくまで俺にとってなんだけど……。

シャルナに聞いて欲しいことがあるんだ」

「……はい」

悠真の声色が突如重みを孕^{はら}んだものに変わり、思わずシャルナは居住^{いず}まいを正す。

そして目を見つめて頷いた。

どう切り出したものかと悠真はしばし考えつつ、やはりここは回りくどいことはやめて単刀直入にはっきり言うべきだと結論付け、口を開いた。

「——今日、この教会を出ようと思う」

「……え」

突然の告白に、シャルナの口から小さな声が漏れる。目が驚きで僅かに見開かれる。

しかし、すぐに平静を取り戻したように声を発した。

「また、急なお話ですね……」

「そうだな、確かに急だと自分でも思う。だけど、当面の生活費が手に入った以上、ここにいるわ



けにはいかなからな」

「で、ですが、すぐに生活費を使い切るという可能性も……っ」

何やら必死に主張してくるシャルナを訝^{いぶか}しみながら、悠真は肩を竦める。

「それはさすがに大丈夫だろ。これだけあれば、よほど大きな買い物をしない限り数ヶ月は持つ。——だから、今日出るよ。いろいろ世話になった。本当にありがとう」

「……………」

頭を下げる悠真を、シャルナは複雑そうな表情で見つめる。

だが、彼を引き留める理由などものはやない。

悠真が頭を上げると同時に、シャルナは諦めを含んだ溜め息を小さく吐いた。

「宿は、お決めになりましたのですか？」

「いや、まだ。取りあえずここを出たら適当なところに泊まろうかなって思ってる」

「でしたら、宿をご紹介しますでしょうか？ 私の知り合いが経営しているところなんですけど……」

「それはありがたい！ シャルナの知り合いなら安心だ」

皆に信頼されている聖女シャルナ。そんな彼女の知り合いが経営しているというなら悪いところではないはずだ。

悠真の言葉に、シャルナは振り返りながら「少し待っていてください」とだけ残して小走りで廊下を駆けていく。

どうやら、宿までの地図を書いてくれるらしい。

待っていてと言われたが、悠真は歩いて彼女の後を追った。

ちょうどシャルナの部屋まで辿り着いた時、中から扉が開けられる。

「つと、ユーマさん。すみません、お待たせしました。こちら、その宿までの地図です。分かりづらい……ですか？」

手渡された小さな紙切れを、悠真は眺めた。

シャルナとの勉強の成果か、地図に書かれている文字ぐらいいなら読むことが出来るようになった。簡潔ながら要点を押さえた地図には、綺麗な字で道順が綴られている。

これなら迷うことはない。

「いや、全然そんなことない！ 分かりやすいよ、ありがとう」

紙を懷に仕舞いながら、悠真は感謝の言葉を口にする。

シャルナは安堵したように表情を和らげ、そしてすぐに寂しげな笑みを浮かべた。

「また、何かあれば来てください。主は万人を平等に受け入れますから」

「ああ。案外、寂しくなってますぐに帰ってくるかもな」

笑いながら悠真は冗談を言う。

そう、冗談だ。そんなことするわけがない。——たとえ、金が尽きたとしても。

「では……」

「今まで本当にありがとう。また何か葉草が欲しかったら言ってくれ」

扉まで見送ってくれたシャルナに手を振りながら、悠真は教会を後にする。

ある程度離れてから、悠真は足を止めて振り返る。

……少し、寂しく思う。きつと、愛着が湧いたのだろう。

それもそのはずだ。

行く当てもないこの世界で、ずっと教会に帰ってきていたのだ。

つまるところ、悠真にとって教会は第二の家。

だが、それこそが教会を出ることを急いだ理由だった。

何も出ると伝えた直後に、こんな風に逃げるように去る必要はない。

しかし、悠真はそうするべきだと思ったのだ。

ゴブリンの襲来からシャルナを救い、その直後に彼女と話して悠真は改めて思った。

いずれ元の世界に帰る自分が、この世界に親しい人を作るわけにはいかない。

彼女に対して自分が抱いた気持ちを実感してしまったからこそ、強くそう思った。

胸にくすぶる感情がこれ以上強く、大きくなってしまわぬ前に。来たるその日に迷うことがないように。

この選択は決して間違いない。

そう信じて悠真は、シャルナのメモを頼りに宿へ向かうことにした。

第一章 討伐依頼

「ここ、か。……あつてるよな？」

シャルナの地図を頼りに目的地である宿の前まで辿り着いた悠真は、そこで何度もメモと目の前の建物とを見比べる。

そうしていると、不意に宿の入口が開いた。

「つと、わるい！　って、お客さんかい？」

中から現れた一人の女性は、薄手の白いシャツを纏い、下はジーパンのような頑丈そうな長ズボンを穿いている。

シャツが薄いせいで彼女の絶妙に強調された体付きがよく分かった。そして首にかけられた薄汚れたタオルの上にはとても整った顔がある。

適度に焼けた肌。紅い瞳にボサボサの短い赤髪。けれど決して不潔な感じはしない。

気風のいい働き者のお姉さん——それが、悠真が彼女に抱いた第一印象だった。

「あー、えっと、シャルナの紹介で来たんですけど」

「シャルナ？　へえ、あの子がここを紹介、か……珍しいねえ」

悠真が口にしたことが意外だったのか、女性は顎に手を添え、悠真を値踏みするようにいろんな角度から見つめてくる。

それが一通り終わると、ニカッとした威勢のいい笑みを浮かべ、宿の中へと悠真を迎え入れた。

「なににせよ、お客さんなら大歓迎だよ。ほら、入りな！」

「お邪魔します……」

勢いに気圧されながら、悠真はおずおずと建物の中に入る。

入ってすぐ、左側に会計をする受付があり、その奥には厨房おほと思しき場所へと通じる入り口がある。

正面には木製のテーブルや椅子がいくつも置かれ、そこで何人もの人が飲み食いしていた。

おそらく食堂だろう。

宿内を見回していると、女性が受付に立ち、悠真に向けて聞いてきた。

「それで、何泊だい？」

「あの、その前に料金とかを確認してもいいですか？」

一ヶ月泊まると言って、今の手持ちでは足りない……なんてことは避けねばならない。

もつとも、今の悠真は懷に百二十万マネあるのだからその心配も無用ではあるが。

悠真に言われて、女性は「おっと……」といった感じで思い出したように料金の説明を始めた。

「朝晩食事付きで一泊五千マネだね。他の店と比べても悪くないと思うよ？」

確かに安いと、悠真は頷き返した。

ファウヌスの宿は安くても一泊五千マネぐらいだと以前シャルナに聞いたが、それは食事抜きの価格だ。

朝晩の食事込みで五千マネ。文句などない。

「そうだな……ひとまず、七泊で。延長すると思いますが」

「あいよ。三万五千マネね」

悠真は貨幣の入った麻袋をゴソゴソと漁り、そこから日本円で一万円相当の白金貨を四枚取り出し、彼女に手渡す。

「これ、おつりね。部屋を案内するからついておいで」

おつりである金貨五枚を受け取り、それをしまいながら女性の後を追う。

正面から向かって右側にある階段を上り、二階へと上がると、そこの一番奥の部屋へと通された。ドアを開けると、六畳程度の片付いた室内の様子が視界に入る。

小さなベッドに、机とイス。そして何かを収納するタンスのような箱が置かれている。

一人で過ごす分には何の文句もない。

「はい、これ鍵ね。失くしたらお金とるからきちんと持っていてね。宿を出る時はあたしに鍵を預けてくれたらいいから」

「ありがとうございます。えっと……」

木の鍵を受け取りながら、悠真はこの女性をなんと呼べばいいのか苦慮する。

それを察したのか、女性は苦笑いを浮かべながら応えた。

「セラフィーナ、セラって呼んでくれていいよ」

「あ、えっと俺は悠真です。お願いします」

「なるほど、ユーマね。……ところで、敬語はやめてほしいな。礼儀正しいのは美德だけど、この商売をしてるあたしとしては、居心地が悪いんだ」

「あーっと、分かった。長いこと世話になるかもしれないんで、よろしく」

「はいはい、こちらこそ長い間利用してくれるとありがたいよ。ところで、朝食はどうする？　まだ間に合うけど？」

「いや、やめとくよ。これから行く場所があるから」

「そうかい。じゃあ夜を楽しみにしときな。父さんの料理はうまいから、そこは期待しなくてくれ！」

セラの言葉に首肯で応じ、「じゃあちよつと用があるから」といってこの場を後にする彼女に手を振る。

彼女が消えたところでドアを閉じ、ひとまず悠真はベッドに倒れ込んだ。
本来であれば、このままギルドに行つて依頼を受ける。
しかし、今日はその前にするべきことがあるのだ。

「——と、行くか」

勢いよく立ち上がり、軽く伸びをすると、悠真は手ぶらで部屋を出た。
そう——実のところ、今悠真は武器を持っていなかった。

持っていた幾つかの武器は、ゴブリンとの戦闘でボロボロになり、一部は紛失していた。
薬草採取の依頼を受けようにも、武器を持たずに草原に行くのは自殺行為だ。

それはギルドの受付嬢ネロに以前厳しく指摘されたことだし、実際、異世界で暮らし始めたこの
数ヶ月間で、悠真自身もその危うさを身をもって理解していた。

目指すは、以前小型ナイフを二本調達した武器屋。あそここの店主は無愛想ながらい人だった。
悠真の手元にはまだ百万マネ以上ある。

これだけあればそれなりの武器をたくさん調達できるはずだ。

そんなことを考えながら、悠真は宿を出て武器屋へと向かった。

十 十 十

「失礼します、っと」

宿を出た悠真は、以前小型ナイフを調達した武器屋を訪れていた。

店の佇まいは変わらずで、客を無理に引き入れようとする様子が感じられない。

悠真は店の引き戸をゆっくり引いて、恐る恐る中を窺うように店内へと入った。

薄暗い店内。壁に飾られている武器の刀身が、僅かな光を反射する。

店の最奥には、やはり変わらず左頬に切り傷をつけた坊主頭の店主がいた。

悠真の声に「らっしゅい」とだけ小さく反応し、そのまま鋭い視線を突きつけてくる。

その迫力に気圧されたが、悠真は店内にさらに一歩足を踏み入れ、後ろ手に引き戸を閉める。

店内に視線を彷徨^{さまよ}わせながら、悠真は見覚えのある武器を見つけて思わず手に取った。

「そうだな、これもいるよな……」

手にしたのは小型ナイフ。

投擲^{とうてき}に使ったり、メイン武器が奪われたり壊れたりした時のために装備しておくのが通例だ。

実際、悠真はこの武器屋で同じものを買い、先のゴブリンの大群との戦いでも存分に活用して
いた。

それほど重たくもなく、四本ぐらいなら持つことも可能だが、正直なところあり過ぎて邪魔な
だけだ。

ひとまず小型ナイフを二本手に取ってから、店主の居る奥へと歩み寄る。

「ん？ ああ、またこのナイフにするのか……」

「もしかして、俺のことを覚えてるんですか？」

「当たり前だろ。ここに武器を買いに来るやつはそう言いねえからな」

店主のなんとも悲しい理由を聞いて、悠真は苦笑いを浮かべる。

「それで？ 今日ほこれだけいいのか？」

「その、新しい武器が欲しいんですが。こういうサブじゃなくて、メインで使える武器、ロングソードとかが」

言いながら、悠真は手に持つ二本の小型ナイフを見せる。

「ん？ お前、以前ここに来た時はソードも持ってただろ。あとあん時もナイフを買っていったが……あのナイフはどうした？」

「あー、いやー……」

バツが悪そうに悠真は頬を掻きながら言葉を濁す。

売る側からすれば、売った武器をすぐに壊したり紛失したりされてはたまったものではないだろう。

だが、店主の鋭利な視線を前に嘘を吐ける気がせず、またそうすることにひどく罪悪感を覚えて悠真は正直に答えることにした。

「ナイフもソードも、ゴブリンとの戦闘で、失いました……」

悠真の言葉に、店主は大きな溜め息を一つ吐く。

悠真は思わず肩を震わせ、ぎゅっと目を瞑った。

その様子は、まるで悪いことをしたのが親にばれた子供のようだ。

——だが、次に店主から掛けられた言葉は予想とは反したものだった。

「たくっ、そういうことは先に言え。……待ってろ、丈夫なやつをとってきてやる」

「……え？」

思いがけない店主の言葉に、悠真は閉じていた目を見開いた。見れば店主は、まさに店の奥へと向かうところだった。その後ろ姿に、思わず声を掛ける。

「お、怒らないんですか？」

「ふん、どうして怒るんだ。使用者と死線を共にし、お前を助けたんだろ？ 武器としてこれ以上の喜びはない」

振り返り平坦な声で答えると、店主はそのまま奥のほうへと引っ込んでいった。少しして、一振りの剣を携えて戻ってくる。

「ほら、望みの品だ」

言葉は乱暴だが、店主はその剣をそっと優しくカウンターに置いた。

悠真はそれをじっと見る。

刃渡りは以前使っていたものと同様、九十センチ程度。つまり西洋刀剣——ロングソードだ。

前の武器と似たようなものをあえて選んできてくれたのだろう。

が、それ以外は特に目立った特徴はない。

文句はないが、店主がわざわざ引っ込んでまで取りに行くほどの業物^{わざもの}には見えない。

「持ってみろ」

やや不満気な表情を浮かべてしまっていたのか、店主が悠真にそう指示する。

そして、言われた通りロングソードを手にした瞬間――

「――！」

悠真は思わず、手に握ったロングソードを凝視していた。

その反応に、店主はニタリと悪戯が成功した時のような笑みを浮かべて口を開く。

「どうだ、軽いだろ？」

「は、はい。なんですか、これ。軽いし、しつくりきます」

「最近発見された鉱石を使った業物だ。そうだな、噂じゃ、かの剣聖もこの鉱石で造られた長剣を使っているそうだ。軽くて丈夫。まさに武器には打ってつけてわけだ」

「剣聖……ッ」

脳裏を、過る^{よぎ}。

ゴブリンの大群を前に無様に地に伏し、臆気^{おぼろげ}な意識の中で見た彼女の――剣聖ラーシャ・ナクレティアの姿が。あつという間に敵を屠^{ほふ}っていく彼女の美しい剣技を見て抱いた、己の無力さが。そ

の屈辱が。

「――」

ふと、今握っているロングソードの刀身が白いことに気付いた。

（そういえば、あの人が使っていた剣も、刀身が白かったっけ……）

そんなことを考えているうちに、悠真の中で既に答えは出ていた。

「じゃあ、これにします。――あと、は……」

ロングソードをカウンターの小型ナイフの横に置きながら、悠真は壁に立てかけられている盾へと視線を向ける。

「おすすめの防具とかはありますか？」

「……あれはやめておけ。お前はまだそれを扱うに足る十分な筋力がねえ。防具ってのはな、装備するだけでもかなりの体力を使うんだ。お前が装備しても動きが鈍くなるだけでろくなことはねえ」

「それはそれは、辛辣^{しんらつ}な評価で……」

店主の齒^{きん}に衣着せぬ物言いに小さく溜め息を零しながら、悠真はそれを否定しなかった。

自分が未熟であることなど百も承知だ。今更誰に言われるまでもない。

「じゃあさっきの小型ナイフ二本とこれをお願いします。いくらですか？」

小型ナイフは以前買ったことがあるので二本で五千マネであることは知っている。だが、ロング

ソードは予想できない。

以前使っていたのはシャルナに貰ったもので、ロングソードの価格相場すら分からなかった。加えて、このロングソードの刀身には最近発見された鉱石が使われているという。

「そうだな……三十万ちよつとつとところか。このロングソードは仕入れたばかりでまだ価格は付いてなかったんだがな」

「さ、さんじゅつ、三十万!？」

「そう驚くことじゃねえだろ。これにはそれだけの価値があるんだからな。——なんだ？　もしかして足りねえのか？」

目を細め、店主は悠真を見つめる。

悠真は小さく首を横に振った。

「い、いえ、あります。えっと、これをお願いします……」

慌てて麻袋を取り出し、白金貨を三十枚と金貨五枚を手渡す。

そして同時に装備を受け取り、身につけた。

武器一本に……三十万円。

価格には驚いたが、悠真はすぐに思い直す。

命を守るための武器。それがたったの三十万円ならば安いものではないだろうか。

今はそれほど蓄えに困ってはいないし、何より収入のあてもある。

そう考えながら、悠真は店主に頭を下げて武器屋を出た。

武器の調達を終え、この後行くのはギルド会館だ。そこでするのはもちろん、依頼の受注。ただし、やることは今までとは少し違う。

「さて、と……」

決意を固めるように小さく呟いてから、悠真は空を見上げる。

内に抱いた悠真の覚悟を後押しするように、そこには雲一つない青空が広がっていた。

十　十　十

ギルド会館に辿り着いた悠真は、ドアを開けようとして少し躊躇った。

今までのように薬草採取依頼だけを受けて草原に向かうのとはわけが違う。

朝方に下した二つめの決断。それは、いわば諸刃の剣だ。

それを理解しているからこそ、悠真はすぐにそのドアを開けることが出来ない。

ただ、このままの自分でいいわけがない。

思い返す。

ゴブリンの大群が押し寄せてきた際に改めて痛感した自分の無力さを。

地に這いつくばりながら見た、真の強者の姿を。

そうなりたいと、そう在りたいと、願っていた悠真だからこそ、感じたことがある。

「——ッ」

唾を呑みこんで、決意を固める。

ここに来て、悠真は自分の愚かさを改めて認識した。

何度固めようとも揺らいでしまう決意。

どうしようもない自分の醜さ。

けれど、それから逃げているだけではこの過酷な世界を生き抜くことは出来ない。

——そのことを、思い知らされたのだ。

俯きそうになっていた顔を上げ、真っ直ぐ前を見つめて悠真はようやくギルド会館のドアを押し開けた。

二人の受付嬢がいるギルド受付。

いつものように、片方には人があまり並んでいない。そしてそこにいるのは、悠真がこの世界に来てから世話になっている数少ない知り合いの一人。

肩ほどまでの水色の髪と比較的高い背丈が特徴的な女性——ネロ・フォレスだ。

ネロは瑠璃色の瞳に悠真の姿を捉えると、僅かにその表情を緩ませた。

初対面の頃と比べたら幾分か打ち解けることが出来たのではないかと、悠真は勝手に思っている。もちろん、それがいいことなのかと聞かれればよく分からない。

悠真は今まで通り、ネロのいる受付へ向かった。

その時ふと、自分をジロジロと見つめてくる複数の視線に気付いた。

ギルド会館の中にいる冒険者達である。

ちらりと悠真は、視線の主達を見返した。

するとすぐさま冒険者達はバツが悪そうに視線を逸らした。

「……？」

彼らのその反応は、悠真にとっては意外なものだった。

冒険者であるにもかかわらず、討伐依頼を受けずに薬草採取だけで小銭を稼ぐ臆病者。

悠真のことを彼らはそう嘲り、蔑んだ。

ギルド会館で顔を合わせるたび、いつも侮蔑の言葉をぶつけてきた彼らだったが、今日向けられてくる視線はいつもと少し違う。

ひとまず冒険者達のこととは頭の片隅に置き、悠真はネロに声を掛けた。

「ネロさん、おはようございます。——早速ですが、依頼を……」

「おはよう、ユーマ。依頼ね……少し待っていなさい。今用意するわ」

「い、いえ、今日は薬草採取ではなくて……」

「……？」

依頼書を取り出そうとするネロを制止すると、彼女は眉を寄せながら悠真を見返す。

その訝しげな視線に一瞬切り出すのを躊躇^{ためら}ったが、しかし胸の内で自身を鼓舞して口にした。

「今日から——討伐依頼を受けようと思うんです」

教会を出ることともに決めた、二つめの決断。

それは、採取依頼だけでなく、討伐依頼も受けるということ。

この世界に来てから決して歪めることのなかったその生き方を、悠真はこの日ついに変えようと決意した。

「……え？」

悠真の突然の発言に、珍しくネロの表情に大きな感情の揺らぎが見てとれた。

その揺らぎは驚きで、そしてその驚きは声となってネロの口から零れていた。

ネロのみならず、周囲にいる冒険者達も驚愕し、悠真の発言の真意と、次なる動向を注視していた。

驚くネロに対し、悠真は再度伝える。

「ですから、今日は討伐依頼を受けようと思うんです。もちろん、採取依頼も受けますが」

討伐のついでに薬草の採取も出来るかもしれない。

採取依頼は原則無期限だ。今日中に採取しないといけないということではない。

何より、討伐依頼となると森の奥に入ることになるだろう。

ここ最近、悠真の懷をだいぶ潤してくれた薬草——マファールをたくさん採取できる可能性も

ある。

「……？ ああ、何かまずいことでも？ 受けることが出来ないとか……」

「ッ、そ、そういうことじゃないわ！ ……ゴブリンの討伐依頼を受けるってことでいいの？ 報酬は一体につき一万マネだけど」

「はい。ただ、一つ確認してもいいですか？ ゴブリンの討伐の証明になる魔石の回収方法なんですけど……」

魔石——つまりはゴブリンの心臓だ。

先日のゴ布林との戦闘においては、気を失った悠真の代わりにラーシャが討伐証明を持ち帰り、悠真はその報酬を分け与えて貰った。

これまで少なくとも数のゴ布林を討伐した悠真だが、正式な討伐依頼ではなかったり、瀕死に陥ったりしたせいで、いまだ魔石の回収方法だけは謎だった。

「もちろん、説明するわ」

コホンと小さく咳をしてから、ネロは慎ましく胸に手を当てる。

「ゴ布林にとっての魔石は、知っての通り心臓よ。だから胸の中心部に魔石は埋まっているわ。倒したゴブリンの胸をナイフなどで開き、魔石を体から引きちぎるようにして採取するの」

「——」
ネロの説明を聞いて、悠真はその光景を脳裏に思い浮かべる。

つまり、倒したゴブリンの死骸の胸を開き、手を突っ込んで魔石を体から抜き取る。

想像するだけで不快になり、吐き気を催す。

だが、それでも――

「分かりました、ではそれを受けます。えっと、期限とかつてあるんですか？」

「いえ、ないわ。性質としては薬草採取依頼と同じね。討伐した数に応じて報酬が支払われるの。ただし、ユーマの場合は、討伐に行く日と戻って来た日は必ずここに記名しなさい」

それが何故なのか、聞くまでもなかった。聞きたくもなかった。

その事実を踏まえても、悠真は討伐依頼を受ける。

本気で討伐依頼を受けるのだと悠真の表情を見て改めて理解したネロは、事務処理を始めた。

悠真に名簿を渡し、署名するよう告げる。

シャルナの指導のおかげで、自分の名前程度ならば書けるようになった。

書き切り、名簿を渡すと同時に、依頼書を受け取る。

「どうして、討伐依頼を受けるの？」

ふと、ネロが尋ねてきた。だがネロの視線は、手元の事務作業に向けられたままだ。

「……え？」

その問いの意味が分からなかったわけではない。

ただ、ネロがそれを聞いてくるのが悠真には意外に思えた。

基本的に受付嬢としての一線を越えて、冒険者の事情に踏み入ってくる彼女ではない。

だから仮に悠真の決断に驚きと疑問を抱いたとしても、そのことに言及することはないと思って
いた。

悠真の困惑の声に、ネロはハッと慌てたように訂正する。

「別に深い意味はないわ。少し気になっただけ」

「いえ別に、それはかまわないんですけど……」

きくと、ネロは自分のことを心配してくれているのだろう。

悠真は頭を掻きつつ少し照れくさそうに答える。

「……変わりなかったんです」

そう、変わりたかった。変わりたい。変わらなければならない。

地球にいた頃の自分を捨て、この世界において自分が憧れ、理想とする強者に近付きたいと。

そんなことを思ったのはきくと、自分の無力さを嫌というほど知ったから。

確かにあの日、自分は勇気を奮い立たせて立ち上がった。

凄まじい数の魔物を相手に戦った。

逃げなかった。

でも、結局のところ、最後の最後で悠真は敗れた。自分一人の手で、守りたいものを守れなかつたのだ。

その屈辱を、身をもって味わった。

そして一方で、あらゆる理不尽を軽々と消し飛ばし、守りたいものを最後まで守り切る真の強者の姿を見た。

この世界に来たばかりの悠真であれば、たとえあの光景を見たとしてもこんなことを考えはしなかっただろう。大切な人が出来ていなかったら、強くなろうなどとも思わなかったはずだ。

悠真の曖昧な答えに、ネロは首を傾げる。

それを見て僅かに苦笑しながら、悠真は軽く会釈をし、ギルド会館の出口へと体を向けた。

弾かれたように、冒険者達が悠真から視線を逸らす。

そのことに気付きつつも、しかし気付いていないフリをして、悠真はギルド会館の扉を開けた。

眩しい光が目飛び込んできて、思わず手をかざす。

さて、と気持ちも新たに、悠真は森へ向かって歩き出した。

第二章 剣聖

ファウヌスを出てすぐに広がる草原。

悠真がこの世界に来てからずっと、ネロチンソウを採取するために活動していた場所だ。

だが、今日はその草原を横切り、森の中へと向かう。

左腰にしまった二本の小型ナイフと、薬草採取用の右腰のスコップ。

そして何より、背中に背負った新調したばかりのロングソードの重みを感じながら、悠真は辺りを警戒しつつ突き進む。

「——」
しんとした森の中。

心臓のバクバクとした音がいやに大きく聞こえる。ゴブリンが近くにいれば、もしかしたらこの鼓動が聞こえてしまうのではないかと思うほどだ。

敵がいつ現れても対処できるよう、右手は常時ロングソードの柄あたりに置かれ、左手は小型ナイフに添えられている。

ものの数分歩けば、振り返っても木々に視界を遮られて草原を見ることが出来ない。

「後戻りするなら今のうちだぞ」

自分に対する意味のない問いを小さく呟きながら、悠真はその場に立ち止まった。

わずか数分間とはいえ緊張しっぱなしだったために喉がひどく渴いたのだ。

持参した水を口に含み喉を潤しながら、悠真は耳を澄ます。

木々がざわめく音はあれど、ゴブリンの気配は感じない。

あるいはこの間の大群襲来の影響でこの森に棲息していたゴブリンの大多数がいなくなったのだろうか。

そんな疑問を抱きながら、水筒を懐に仕舞って悠真は更に奥へと進む。

「ん……？」

進むこと数十分。

獣道のような、草木に阻まれ^{はば}かろうじて身動きがとれる道なき道を歩いていると、突然足下でバキッという音が鳴った。悠真は訝しんで視線を落とす。

足下には小枝が敷き詰められていた。

（なんだ、小枝か……）

緊張状態にあった悠真は異音にドキリとしたが、その音の正体がただの小枝であったことに胸を撫で下ろす。

ただ次の瞬間、どうして緑生い茂るこの場所に小枝なんかが敷き詰められているのか。その疑問が脳裏に浮かび、意識して答えを考えるよりも先に背筋にゾワリと悪寒がした。

「——ッ！」

同時に、何かが風を切る音が耳に飛びこむ。悠真は一瞬先に本能に従ってその場を力強く蹴り、前に跳びこむようにして転がった。

先ほどまで立っていた場所に敷き詰められていた小枝がバキバキとへし折れる。悠真はすぐさま振り返り、ロングソードを引き抜いた。

「……なるほど、その小枝はお前の仕業ってことか」

赤黒い刃物を持った小柄の化け物。濃い緑色の肌は森に馴染んでいる。

言わずもがな、ゴブリンの登場である。

「集団での戦い方から知能はあると思ってたが、まさかこんなものまで仕掛けてくるとは予想外だった。……それにしても、お前一人か」

目の前のゴブリンに意識を向けながらも、悠真は周囲の気配を探る。

そして目の前の一体しかいないことが分かると、口角を上げた。

「こちとらそれなりに経験を積んできたんだ、この世界に來たばかりの時のようにはいかないぜ。」

「一体程度なら……」

悠真がまるで自分に言い聞かせるように呟いていると、それを遮るがごとくゴブリンが地を蹴った。

真正面に跳びこんでくるゴブリンから目を逸らすことなく、悠真は一旦回避しようと足に力を込めて、気付く。

（逃げられない……！ くそっ）

左右に立ちはだかる木々に逃げ道を阻まれ、悠真は仕方なくゴブリンの突き出してきた刃物をロングソードで受け止める。

ガキンツという不快な金属音が鳴る。悠真はそこから更に力いっぱいロングソードを振り抜いた。

「……っ！」

これまでの戦いでの経験上、純粹な力でいえばゴブリンを軽く上回っている。

狙い通り、ゴブリンは手に持っていた刃物ごと吹っ飛んだ。

「ギャギャアツ!!」

不安定な地面に足をとられたゴブリンは、着地に失敗して転がる。

そこに付け入ろうと前屈みになるが、すぐさま体勢を立て直したゴブリンを見て攻勢に出るのをやめた。

（周囲に開けたところはない。やっぱりこの獣道で戦うしかないか）

あまり狭い場所で戦った経験はないが、相手が複数いるならばまだしも単体ならばなんとかなる。大きく息を吐き出し、意識をより鋭敏にしていく。

ゴブリンは今の攻防で単純に突撃しても同じことになるかと判断したのか、悠真の出方を窺うように刃物を構えたまま動かない。

間合いにどう入るか。

まるで剣道の試合のようだなと思いつながら、しかしそんな自分を戒める。

これは剣道ではなく、殺し合いなのだ。

自分から詰め寄ってもいいが、小柄なゴブリンにこの狭い空間の中で動き回られては、悠真自身に隙が生じるかもしれない。

相手はこちらの一挙手一投足を見逃すまいとその視線を向けてきている。

迂闊には突っ込めない。

ふと、左腰にある重みを思い出す。

（……このまま硬直していたら仲間が来るかもしれない。早めにけりをつけるには、やってみるか）

ゴブリンに隙がないのならば、隙を作ればいい。

ロングソードを右手で握り、その剣先をゴブリンに向けて牽制しながら悠真はこっそり小型ナイフを握る。

そして――

「おらあつ!!」

威嚇^{いご}の叫び声とともに、悠真は小型ナイフをゴブリンに向けて投擲^{とうてき}する。と同時に、全力で間合いを詰めた。

ゴブリンは放たれた小型ナイフを刃物で弾き返す。

小型ナイフが勢いを失い地面に落ちるよりも先に、悠真は刃物を振ったことによつてがら空きとなった胴に向けてロングソードを突き出した。

「グギャアッ!!!!」

叫び声を上げるゴブリン。だが、踏み込みが浅かったらしい。まだ命をとるには至っていない。

ゴブリンは腹部に突き刺さったロングソードから逃れるために身を振^{よじ}っている。

「ッ、逃がすかよッ!!」

が、この好機を見過ごしはしない。

すかさずもう一本の小型ナイフを右手で握り、ゴブリンの頭部に向けて振り下ろした。

「ギョアッ……」

叫び声は尻すぼみになり、そして消える。

ゴブリンが絶命したのを確認して悠真はナイフとロングソードを握っていた力を抜き、やがて全身を脱力させた。

「ッ、ハアッ、ツア、ハア……」

その場に尻もちをつくと、思い出したように荒い呼吸を繰り返す。

命を奪うことにまだ慣れていないのか、悠真はゴブリンの肉を穿^{うが}った感触を思い出して手のひらを見る。

早く慣れてしまったほうがいいと思う自分と、慣れてしまつてはいけないと思う自分。

相反する二つの考えが浮かぶも、悠真はそれを振り払うように立ち上がる。

余計なことは考えるな。ここは森の中、悠真にとっては敵地。

相手を仕留めたのなら、早々に討伐部位――魔石を回収すべきだ。

息を落ち着かせ、悠真は先ほど投げた小型ナイフを回収してゴブリンの死骸と向き合った。

十 十 十

ゴブリンの死骸に歩み寄り、その傍らに片膝をついた。

そして、頭部に突き刺さっているナイフを抜く。

グジュリと肉が挟れる異音が響き、悠真は僅かに顔を顰^{しか}めた。

ゴブリンを討伐したことの証明である部位――魔石は胸のあたりにあるという。

要は心臓を死骸から挟り取れということだ。

「——ッ」

絶命したゴブリンには、先ほどまで命を奪い合っていた時のような活力はない。同情なんてしない。

後悔なんてしない。

けれど、死骸を解体するという行為には酷く嫌悪感を抱いた。

鼻を突く異臭。目に映る光景。体に飛び散った体液。

そのすべてが悠真に拒絶反応を抱かせる。

戦っている時はそんなことを考える余裕すらない。

だがこうして危機を脱した今だからこそ、平穏な日本で過ごしていた倫理観とでもいべき枷^{かせ}が彼の行動を阻害する。

だが思えば地球でも同じことをしている人はいる。

日々何気なく口にしていた肉だって、誰かが家畜を殺し、そして解体しているのだ。

今やろうとしているのはそれと同じだ。

「ここは平和な日本じゃないんだ。そんな役に立たない道徳なんて捨てろ……」

揺らぐ決意を固めるように悠真は一度目を瞑り、それから大きく息を吐く。

そして目を開けると同時に——

「うおおおおッ!!」

先ほどゴブリンの頭部から引き抜いたナイフを、今度は胸部に突き刺す。

この世界に来て幾度となく味わった、手に握る何かが肉を裂く感覚、音。

それらを気にしないよう努めながら決っていくと、刃先にコツンと何かが当たるのを感じる。悠

真はそこでナイフを止めた。

そしてそのまま、胸部を開くように縦に切り裂いていく。

血と肉。その中でうっすらと赤く光る何かを捉えた。

「これ、か……」

ナイフを引き抜き、そして少し躊躇ってから悠真は胸に右手を突っ込んだ。

直接右手から伝わってくる生温^{なまぬる}い体液と、周りを覆う肉壁。

それをかき分けながら硬い何かに手があたり、それを掴んで一気に引き抜いた。

「……ッ、ホント、割に合わないよな……」

取り出した赤い石を空にかざしながら、同時に腕にこびりついたゴブリンの血に眉間の皺を寄せ、悠真は溜め息とともにそう吐き捨てた。

十 十 十

あの後どっと全身に疲労が襲い掛かり、悠真は二体目のゴブリンの討伐に向かうことなくファウ

ヌスへと引き返していた。

腕にこびりついた血は持参していた水で軽く洗い流したが、服に飛び散った汚れまでは拭いきれない。

さっさと着替えたいと思いつながら悠真は帰路を急いだ。

草原まで戻るとゴブリンを警戒する必要もなくなり、ホッと一息吐く。

すると、その瞬間にガクガク……と膝が笑った。

その場にへたり込みそうになりながらも辛うじて踏ん張り、自嘲の笑みを浮かべる。

そして背中に担ぐロングソードの柄にそっと触れた。

たった一体とやり合っただけでもここまで疲労する自分に少し呆れる。だが、今日一日ですぐに

何かが変わるとは思わない。この積み重ねが自分を高めてくれるのだ。

そんな気持ちに胸に、悠真は大きく息を吐き出して再び足に力を籠める。

しばらく歩くと、もはや見慣れたファウヌスの街が目に入る。

永く住んだ街のように、悠真はギルド会館へと迷うことなく突き進む。

血で汚れた姿もここでは別段不思議なことではなく、好奇の視線に晒されることはない。

特に何の問題もなくギルド会館に辿り着くと、悠真はドアを押し開け、受付へと歩み寄る。

「！ ユーマ……」

「あ、ネロさん。討伐依頼の達成報告をしたいんですが」

ユーマを視界に収めたネロは、その血塗れの姿を見て一瞬目を見開く。だが、彼自身に目立った怪我がないことが分かり、一瞬安堵したように一息つくと、すぐに表情を引き締めた。

「ええ、じゃあ討伐部位を提出してちょうだい」

「えっと……これですね。一体しか倒せていませんが」

「最初から無理に倒そうとしなくてもいいわ。何事も初めはじっくりやるのが一番よ……確認したわ。じゃあ報酬の一万マネを用意するわね」

「あ、ありがとうございます」

彼女なりの励ましなのか。フォローをされて悠真は思わず頬を緩める。

やはり彼女とはそれなりに打ち解けることが出来ているのかもしれない。

ただ、すぐに緩んだ頬を両手でパンと叩いた。

自分の勘違いかもしれないし、何より打ち解けることが必ずしもいいことだとは限らないからだ。

「見たところ服に付いた血はゴブリンのもののようにだけど、怪我はないの？」

報酬を渡しながら、ネロが気遣わし気にそう聞いてきた。

「ええ、一体だけでしたので。お気遣いありがとうございます」

「……ギルドの職員として冒険者の管理するのは当然のことよ、変な勘違いはしないことね」

「はは、分かってますよ。では、また明日……」

打ち解けていると思ったのは、やはり勘違いかもしれない。

ネロの鋭い視線に、悠真は肩を竦めながらギルド会館を出る。
そのまま帰路に就こうとしたところで、悠真はふと足を止めた。

「……そうか、もう教会を出たんだった」

習慣とは恐ろしいもので、普通に教会に帰ろうとしていたことに気付く。悠真は不意に気恥ずかしくなり、それを誤魔化すように頭を掻いた。

そしてすぐさま体の向きを変え、シャルナに紹介された宿への道へと足を向けた。

＋＋＋

「ただいま……っっていうのはおかしいか」

初めての討伐依頼を終え、悠真は宿屋へと戻っていた。

年季の入った宿屋の扉に手を掛けながら一人呟く。

力を込めて扉を開くと、まだ見慣れない光景が視界に映る。

正面の食堂。雰囲気的には居酒屋に近いそこには、十人近い数の冒険者がそれぞれのグループで集まり、食事をとり、そして酒を飲んでいた。

教会で暮らしていた悠真には、これまでギルド会館以外で冒険者と会う機会があまりなく、会ったとしても道ですれ違う程度だった。

しかし今後はこうした食事の場でも顔を合わすことが増える。

(採め事にだけはならないように注意しないとな)

冒険者達の隆々とした筋肉を見ながら悠真は溜め息を吐く。

何かあった時、あの屈強な肉体の彼らにはとてもじゃないが勝てる気などしない。

「おっ、今帰ったのかい？ おかえり！」

目の前の光景に氣をとられていると、左側のカウンターの奥から、セラが朗らかな笑みを浮かべながら出てきた。

「ただいま」

今日初めて知り合ったはずなのに、自分でもビックリするほど自然に言葉が出た。彼女の人徳だろうか。

悠真が笑みを浮かべながら応えると同時にセラが歩み寄ってくる。

「取りあえず部屋に戻って脱いできな。すぐにお湯を張った桶と拭くものを持って行くから！」

「あ、ああ……すみません」

言われて、今着ている服がゴブリンの血で汚れていることを思い出す。

セラに頭を下げながら階段を上がり、自分の部屋に戻った。

テーブルの上にロングソードなどの装備を置き、汚れた服を脱いで畳んでいるとドアがノックされた。